

郷土史団体の歴史と現状

——滋賀県の事例から——

高 田 知 和

東京国際大学論叢 人文・社会学研究 第10号 抜刷
2025年（令和7年）3月20日

郷土史団体の歴史と現状

——滋賀県の事例から——

高 田 知 和

History and Current Status of Local History Groups: Case of Shiga Prefecture

TAKADA, Tomokazu

Abstract

This paper clarifies the history and current status of local history groups in Japan. For this purpose, we studied the case of the Minakuchi Town Local History Association in Koka City, Shiga Prefecture, a group founded in 1959. By mainly using newsletter articles, we clarified the 65-year history of the association till present day and its current status.

The following four conclusions were identified.

- 1: In 1959, a local history group was established in the town of Minakuchi by an outstanding local historian. Since then, however, the Minakuchi Town Local History Association has changed its character in accordance with the social changes. In present day, it has transformed itself into a social and educational organization that actively assists with community development.
- 2: Since the 2000s, the relationship between the local government and the Minakuchi Town Local History Association has improved due to an increase in the importance of cultural property administration.
- 3: However, the local residents still have a strong interest in the history and folklore of the area that they live in. Therefore, today, the Minakuchi Town Local History Association is not an association for a small number of researchers, but an association for satisfying the intellectual curiosity of many residents.
- 4: Recently, new developments in local history research have emerged, such as rise in small group activities clarifying the history of the area.

In summary, we believe that while it is true that the membership of local history groups is aging and declining, local history groups and local residents can open up new possibilities for local history through collaboration with specialists and the government.

Keywords: Local History, Local History Group, *Minakuchi-machi Kyoudoshikai*, Local Community, Koka City

要 旨

本論文の目的は、日本における郷土史団体の歴史と現状を明らかにすることである。この目的のため、1959年に設立された、滋賀県甲賀市にある水口町郷土史会を事例として取り上げた。そして今にいたる65年間の同会の歴史と現状を、主に会報の記事を使って明らかにした。

そこで得られた結論は次の4つである。

第一。水口町では1959年に優れた一人の郷土史家によって郷土史団体として水口町郷土史会がつくられた。その後、同会は社会の変化に応じて性格がやや変わり、今では「まちづくり」に積極的に協力する社会教育的要素も持つようになった。

第二。2000年代以降、地方自治体と水口町郷土史会の関係が非常に強くなった。これは文化財行政の重要度が増したことのあらわれだった。

第三。しかし、地域住民たちは、自分たちが住む地域の歴史や民俗への関心を今でも強く持っている。したがって今日、同会は少数の研究者のための団体ではなく、多くの住民たちの知的好奇心を満足させるための存在になっている。

第四。これらの一方で、近年では少人数のグループで地区の歴史を明らかにする活動が盛んになるなど、郷土史研究では新しい展開が出現している。

以上から、郷土史団体の会員が高齢化したり減少したりしているのは事実であるが、その一方、郷土史団体や地域住民が行政や専門家との協働を通して新しい郷土史の可能性を切り拓いていくことができると考えられる。

キーワード：郷土史、郷土史団体、水口町郷土史会、地域社会、甲賀市

目 次

- I. 本稿の目的
- II. 郷土史団体とは
- III. 本稿の対象——滋賀県甲賀市、旧甲賀郡——
- IV. 事例としての水口町郷土史会について
 - 1. 郷土史家・中西義孝
 - 2. 水口町郷土史会のあゆみ
 - 3. 水口町郷土史会ではどんな歴史や民俗が語られてきたのか
- V. 地域の歴史への関わり方とその多様化
 - 1. 郷土史団体に集まる二つのタイプ
 - 2. 少人数のグループと行政
 - 3. 地域の歴史に関わっていくこと
- VI. 郷土史団体の行方——まとめに代えて

I. 本稿の目的

一定の地域を対象にして、歴史学の専門家ではない普通の地域住民たちが集まってつくる、自

地域の歴史や民俗などを探求する団体は、一般に「〇〇史談会」とか、「××郷土史会」などという名称がつけられることが多い。こうした団体はまとめて地域史研究団体と呼ばれることもあるが、¹⁾むしろ郷土史団体と言われることが多いので、本稿でも郷土史団体と呼んでいく。²⁾これらの団体のなかには戦前から活動を継続しているものもあるが、今活動しているものの多くは第二次世界大戦後に設立されたものである。それはまた、いわゆる郷土史家たちを中心にして活動が展開されてきたものといっていよい。

しかしそれらは、近年では全国どこでも会員の高齢化と減少が指摘されるようになった。長きにわたって地方史文献目録の作成に携わって来た飯澤文夫氏は、³⁾『東海近代史研究』第30号（東海近代史研究会、平成20）で田村貞雄氏が発表した「地方史研究会の衰退」という論考に拠りながら次のように指摘している。

「会員減少の要因は会員の高齢化が大きく、財政悪化から活動が鈍り、精彩を欠いた会には新たな会員を呼び込むことができないという負の連鎖を招いている。団体によっては、自治体からの助成金を得ているところもあるが、自治体の財政悪化によって、減額あるいは打ち切られるところも出てきているようだ。」

「どの団体も高齢者の比重が極端に大きくなり、出席は同窓会のようなもので、若い人を育成する機能も失われているばかりか、高齢者は年々減り、会の財政も苦しくなっている。」⁴⁾

田村氏の論考を受けた飯澤氏のこのような指摘は、極めて正しいものといえるだろう。もっとも、日本社会全体が高齢化・縮小しているのであるからこうした問題は郷土史団体だけではないのであるが、実は郷土史団体に限定してその実状を調べた研究は意外に少ない。その一方で、この二、三十年の間で、郷土史自体についてはアカデミズムの側からは再評価されるようになった。近年のものに限っても、平成29年（2017）の名古屋大学近現代史研究会では拡大例会「郷土史家の仕事とその遺産」が開かれ、主に東海地方の郷土史家たちの仕事が再評価された。⁵⁾また神戸大学地域連携センター年報『Link：地域・大学・文化』第14号（令和4）でも「地域史研究団体の潮流」という小特集が組まれ、兵庫県内の幾つかの郷土史団体の活動が紹介された。⁶⁾他方、国民的歴史学運動との関連で京都府の城南郷土史研究会を取り上げて考察した高田雅士『戦後日本の文化運動と歴史叙述』のような業績も出てきている。⁷⁾これらのうち名古屋大学近現代史研究会が扱ったのは厳密には郷土史団体ではなくて郷土史家たちであるが、郷土史団体も含めて、アカデミズムから再評価されていると言ってよい。⁸⁾

ただ注意すべきは、郷土史団体について述べる場合、ともすればその会を代表する二、三の郷土史家たちが取り上げられることが多いのだが、彼らを紹介することと郷土史団体そのものを語ることは必ずしもイコールではないことである。郷土史団体にはほんの少しだけ地元の歴史に興味があるという程度の人たちも大勢入っているものであり、彼らにも目配りをしなくては団体としての全容に迫ることはできない。実は先に挙げた飯澤氏の指摘の元になっている田村氏の論考でも、郷土史団体が高齢化などのために活動が停滞し、そのため「出席は同窓会のようなもので、懇親の昼食会や史蹟見学はにぎやかである。それはそれで結構なことではある」とされている。⁹⁾そしてこのところを前後も含めてよく読むと、自分で一次史料を調べて研究成果を書いていくことのできる人と、特にそうしたことはできないが懇親会や史蹟見学には喜んで参加する会員たちとの間に、違いが設定されていることに気づく。後述するように、この違いは多くの郷土史団体では自覚されていることであり、その点に着目してみれば、田村氏は昼食会や史蹟見学になると参加する多くの会員がいるのは「結構なこと」として否定しないが、研究成果を論じ合うことのできる地元の研究家たちの活動が停滞してしまっていることを憂いていたといえることができる。

だろう。

そこで本稿は、滋賀県内の一つの郷土史団体を取り上げて、いわば研究家のような活動は志向していないものの地元の歴史には興味があるという人たちのことも視野に入れて、その設立から現在にいたるまでの変容を具体的に検討していく。滋賀県は、字誌とか大字誌と呼ばれている地域史誌の編纂が盛んなところである。¹⁰⁾ こうした地域史誌は、定義にもよるが概ね自分たちが暮らしている字、大字や町内会・自治会ほどの範囲の歴史をその地域住民たちが調べてまとめたものといっていよい。¹¹⁾ したがってこれが多いということは、それだけ地域社会のなかで歴史が意識され、それを記録にとどめようとする働きが強いということでもある。そのような特質を持つ滋賀県では、郷土史団体も戦後多くつくられてきた。本稿では、そうしたなかの一つの団体の活動を継続的に見ていくことを通じて、地域で地域の歴史を書いてきたこのような団体の経緯と現状を明らかにしていく。そしてこの作業を通じて、地域社会に生きる人たちと当地の歴史の関係性についても言及していくことにしたい。

Ⅱ. 郷土史団体とは

近世の地誌研究で知られる白井哲哉氏によれば、郷土史や郷土史家という範疇は近世以来の地誌の伝統とは一応分けて考えられるべきで、「郷土史」は、一九三〇年代に提唱される歴史学の研究動向を指し、「郷土史家」は、二〇世紀の郷土研究や郷土史に従事した民間の人びとを指す」とされている。¹²⁾ 他方、羽賀祥二氏によると、「歴史知識の秩序化、叙述、古文書の蒐集と活字化といった作業」がいつ頃から始まったかということ「郷土史の誕生」と呼び、それは一九世紀前半頃からだろうとしている。そして大正から昭和期になる頃には、幾人もの偉大な業績を残す郷土史家の成果となって現われたということである。¹³⁾

このように郷土史という営み自体の歴史についてはまだ議論の余地があるようだが、ただ現在活動している郷土史団体の多くは、先述のように実質的には第二次世界大戦後につくられたものである。戦前には突出した郷土史家たちが個人で活動していたものが、戦後になると会をつくって組織化したところも多い。やがて昭和30年代以降、このような郷土史団体は、自治体史編纂が全国的に盛んになるとその実働部隊として活動した。郷土史団体に集まっていた人たちの手で自治体史が編まれることも多かった。

今一つ、郷土史団体に拠った人たちが気を揉んでいたのは、郷土の文化財や史料が戦後著しく散逸して失われていたことだった。したがって彼らは自分たちの暮らす地域のなかでどんな文化財があるのか、それをどう保存していくのかということにも熱心に取り組んでいる。そしてこうした活動のなかで、著名な郷土史家も多数生まれてきたといえることができるだろう。¹⁴⁾

では全国でどのくらいの数の団体がつくられてきたのかということであるが、それは不明としか言いようがない。というのは、郷土史団体の規模や範囲はさまざまで、特に少人数の集まりも含めれば無数になるからである。前掲飯澤文夫氏は、会誌や通信を発行している郷土史団体に限っていえば、平成23年1月時点で全国で815団体あったとされている。とはいえこれも、「会誌等を持たずに小規模で地道に活動を行っている団体は、かなりの数があるのではなかろうかと思われるが全国にわたって把握することは、大変に困難なことである」とのことでもある。¹⁵⁾

また郷土史団体ではどんな活動をしているかというと、全国どこでも概ね似通っている。研究会を開催して個々の研究発表、講演会の開催、自地域の文化財の確認と保存、遺跡発掘、県内外の史蹟見学旅行、それと会誌や会報の発行といったところである。¹⁶⁾ 会誌は冊子形態の機関誌で、

会報は一年に数度発行されるような連絡誌であるが、会誌はなくて会報だけ出している団体もある。そういう団体では会報に会員たちの研究成果である論考が掲載されているので、会報といっても会誌としての性格を持っているものも多い。

Ⅲ. 本稿の対象——滋賀県甲賀市、旧甲賀郡——

以上のことを前提にしたうえで本稿で検討していくのは、滋賀県甲賀市水口町にある水口町郷土史会である。同会は昭和34年5月に設立され、現在（令和六年）の会員は240人ほどである。男女比は7:3くらいで、現副会長の話によれば会員のほとんどは現在70歳代以上であるという。¹⁷⁾

同会では設立以来、会報を出してきた。前述のように、会誌はなくて会報のみ出している団体では会報が会誌の役割も果たしていることがあるが、水口町郷土史会ではまさにそうで、会員たちの研究成果が会報にもよく掲載された。会報は昭和34年7月の第1号から、当初は毎年二回、ついで一回、中断していた時期もあるが、近年では会員間の事務連絡という主旨で回数が増やされて毎年三回出されている。本稿を執筆している令和6年9月時点では、103号が最新刊である。そこで本稿では、主にこの会報を資料として用いていくことにする。¹⁸⁾ 会報のような定期刊行物は郷土史団体にとっては重要で、「地域で私的に歴史研究を続けるためには、何よりも仲間と媒体と意思が必要であり、その結晶が雑誌（同人誌・会報を含む定期刊行物）だ」とも言われており、¹⁹⁾ 水口町郷土史会の変遷を考察するには好都合な資料と思われるからである。

ところで甲賀市は、平成17年に旧甲賀郡のうち、北部にあった石部町、甲西町を除いた五町——水口町、甲南町、甲賀町、土山町、信楽町——が合併して成立した比較的新しい市である（石部町と甲西町は二町で合併して湖南町となった）。

旧甲賀郡は低い山が続き、古代には東大寺造営などの杣山とされた。当時は、「鹿深（かふか）」とも書かれていた。また古代も東海道がこのエリアを通っており、伊勢神宮に参る斎王の頓宮がつくられるなど、歴史は古い。近江国とはいえ琵琶湖に接していないこともあり、むしろ伊賀や伊勢とのつながりが深かった。

中世末の戦国期には地形の理由もあって甲賀郡内には大きな大名権力が生まれなかったため、土豪クラスの豪族が多数力を持ち続け、彼らが取り結んだ「甲賀郡中惣」や甲賀武士たち、さらには近世の甲賀忍者たちは地元の歴史愛好家たちにとって興味が非常にそそがれるテーマになっている。水口では戦国末期に長束正家が在城していたが（当時の名称は岡山城で、近世の水口城とは場所も違う）、関ヶ原合戦時に正家は敗死、その奥方も非業の最期を遂げた。近世になると水口は東海道の宿場町であると同時に水口藩が置かれていたので「城下と宿場の町」と言われる特色ある地域となり、近世後期には旧甲賀郡一帯では天保義民一揆と言われる激しい農民一揆が起きた。これらの出来事も、郷土史会では関心が高いテーマである。²⁰⁾

なお、平成の大合併当時、郷土史団体は旧甲賀郡域各町にあった。旧甲賀郡では「甲賀郡郷土史研究同好会」という組織が昭和30年代にあり、²¹⁾ 若干の成果を出していたが長続きしなかったようである。²²⁾ また、昭和50年代後半には改めて甲賀郡全域を対象にした「鹿深史談会」がつけられたが、こちらも目立った活動は記録されていない。²³⁾

近年、甲賀市成立を機に甲賀市内の郷土史団体が連携する「甲賀市郷土史連絡協議会」が作られたが、これも毎年の総会時に講演会が開かれる程度である。

また、滋賀県全域で考えると、県内で個々に活動していた郷土史団体全体をカバーする会もかつてはつくられていたが、現在は存在していない。すなわち、昭和30年代前半には滋賀大学学芸

学部（当時）に事務局を置いて「滋賀県郷土史学会」がつくられたが、機関誌『滋賀郷土史』を第三号まで出したところで活動は停止した。ついで昭和40年代に入ると、滋賀県立図書館が同館内に事務局を置いて「滋賀県地方史研究家連絡会」を組織して県内の郷土史活動を網羅する集まりをつくったが、昭和60年頃に活動はやはり停止してしまっている。

このように水口周辺では、滋賀県全域でも旧甲賀郡域でも郷土史団体の連携は活発なものではなく、各地区の郷土史団体では個々の活動が多くを占めているという状況にある。

Ⅳ. 事例としての水口町郷土史会について

1. 郷土史家・中西義孝

水口町郷土史会の設立は、前記のように昭和34年5月のことであった。中心人物は中西義孝（明治21—昭和48）という人物である。中西は明治21年に水口に生まれ、幾つかの郡役所や信楽窯業試験場に勤務し、甲賀郡役所書記時代には大正15年に出版された『甲賀郡志』の編纂にも携わっていた。やがて昭和8年に仕事をやめて以降は、郷土史研究に専念し、特に甲賀武士と忍者研究に励んだ。旧甲南町に残る忍術屋敷を「発見」したのも中西だという（会報29号、昭49—以下、会報からの引用はこう表記する）。郷土史会が設立される以前から中西の名前は知られていたようで、彦根史談会の『彦根郷土史研究』第二集（昭和32）には、昭和31年3月11日に彦根市立図書館で、「甲賀忍術と其の武士」という演題で中西が講演し、約40名が来聴したという記事が出ている。²⁴⁾ なお中西の死後、郷土史会が編集して『中西義孝遺稿集 甲賀歴史秘話』（山川書店、昭和53）が刊行されている。

この中西が死去した後で会報『みなくち』29号が中西の追悼号として出され、そこで多くの人が中西について書いているが、それを読むと中西がいかに郷土史に打ち込んでいたかが分かる。紙幅の関係で一つ一つを紹介できないが、各人の追悼文から浮かび上がってくるのは、子どもの頃から大の歴史好きで、郷土の歴史のこととなると目がなく、何ものかにとり憑かれたかのように歴史に打ち込んでいた「郷土史の虫」²⁵⁾ という人物像である。とりわけ死の床に就いていた時に、既に意識が混濁していたのに見舞い客に向かって、「（水口町）郷土史会はしっかり勉強してや。文化財を大事にしてや」とようやくの思いで口にしていたという回想もあり、いわば郷土史家の典型的な人物だったようである。²⁶⁾

この中西が中心になって、水口町郷土史会は発足した。設立時の役員は、会長の中西を入れて20人いるが、このうち学校の教師2人、宮司2人、僧侶4人、それと昭和35年刊行の『水口町志』で地元の編纂委員だった2人で、²⁷⁾ 要は地元の知識人層が中心の会であったといえるだろう。²⁸⁾

2. 水口町郷土史会のあゆみ

ここからは水口町郷土史会が昭和34年設立から本稿執筆時点である令和6年まで歩んだ65年間の推移を検討していくこととするが、同会では平成21年の時点で会のあゆみを6つの時期に区分している。²⁹⁾ そこで本稿でもこの時期区分を踏襲することとする。但し、第6期に関しては現在までに21年間となり他の期に比べてかなり長くなるため、表1のように本稿では新たに第7期と第8期を設定して考察することにした。

なお、以下では先に述べたように主に会報『みなくち』に依拠しながら検討していくが、会報は第4期頃から会全体の動向を伝える記事が見えてくる。そこで第4期以降では、特に項目立てはしないが、概要/会としての活動/会報掲載の論考の三つを意識して考察していくことにしたい。

表 1 水口町郷土史会の時期区分

時期	年代	時期名
第1期	昭和34-40年頃	創立、初期活動の頃
第2期	昭和41-48年頃	個人研究発表の場として/そして町へ文化施設の建設を提唱
第3期	昭和49-60年頃	とまどいを越えて/会組織と、会「活動の再構築」
第4期	昭和61-平成5年頃	歴史特別講座の開講と/水口城角櫓の復元に係わって
第5期	平成6-14年頃	町、関連団体との/歴史文化事業の協力タイアップ活動
第6期	平成15-21年	地元史跡の再発見と/まちづくりを含めた活動へ
第7期	平成22-30年	甲賀市歴史文化財課との強いつながりへ
第8期	令和1-6年	コロナ禍を越えて

出典) 水口町郷土史会記念誌編集委員会編『創立五十周年記念 あゆみ50年』(水口町郷土史会, 平成21) 11, 25, 35, 45, 59, 73頁より作成。

注) 第1-6期の時期名は同書より。第7期と第8期は筆者が命名した。

○第1期（昭和34-40頃）

第1期の具体的な様子については資料がなくて不明であるが、当時の会については、次のような回想が残されている。

「昭和三十四年頃は、戦後の社会から少し落着きが出てきた時代で、仕事や社会情勢にも余裕が見られ、仕事の外に何か変った事を考えるようになり、時ととき、郷土史や文化財を発掘する楽しみを持ちたいと言う人々が会の創立を考える事になり、中央公民館に於ても有志者数名が集り、現実的なものへと話を運ぶ事になりました。当時、水口では波濤ヶ平に古墳二基が発見された事と、会長となられる中西義孝氏が甲賀武士の研究をされており、その研究資料の発表等が旨く一致して、具体的に創立への運びになったのではないかと考えられます。

創立以来しばらくこれと云った集まりもなく、中西会長の研究された資料によりお話し会が開かれました。その間、会の運営について役員会がもたれ、その結果、各学区にあります文化財を見学したいと言う希望が出て、水口学区として、今回、発掘された波濤ヶ平古墳の現地説明会がありましたが、当時は自転車か歩くしかなく、希望者の一部の人は参加したくてもできなかったと言う現実があり、色々と考えさせられる面がありました。然し、見学することに興味が湧いてきたのか、少しずつ参加人員も増えるようになってきて各役員も計画を立て易くなり、回数も増えるようになりました」(佐々木堯信「『生きていく…』あの頃から五十年」『創立五十周年記念 水口町郷土史会 あゆみ50年』平成21, 17頁)。

初期の郷土史会の状況としては、概ねここで書かれているようなものだったのではないかと。つまり、会をつくってはみたものの、具体的に何をどのように進めていくかは決まっていなかった。そこで会長の中西を中心にした勉強会的なものが開かれていた。そのうちに、まず水口町内にはどのような文化財があるか見ていきたいという希望が出て見学会をするようになった。それがやがて広まっていった参加人員や見学の回数も増えていったということである。

ただそれと同時に、水口町では昭和30年代半ばに町指定の文化財を検討するため町内にどの程

度の文化財が存在するのか、町で指定する文化財のために資料作成を企図した際に、町からの依頼があって郷土史会がその資料を作成している。会長の中西は、町内各地の会員たちの協力を得て資料を作って町教育委員会に提出しており、いわば郷土史会が町の文化財保護の最前線で活躍していた（会報6号、昭36）。

ところで、この時期の会報を見てみるとさまざまな論考が載せられている。なかには、歴史とは直接関係ないエッセイ風のものもある。ただ執筆回数は、当然ながら中西が断然多い。歴史の論考を書いているのは、この他には柏木神社宮司である川島雅直など数名であり、やはり中西が絶対的な中心だったことがうかがわれる。

なお、本会でやや特徴的に思われるのは、会則第三条で「本会は会員相互の連絡親睦をはかり郷土史探究を推進すると共に本町観光協会並に水口町文化協会と連携協調して郷土文化の発展に寄与することを目的とする」とある点で、歴史や民俗を探求するだけでなく、観光協会や文化協会とも連携協調していくものとして説かれていることである。実はこの部分が今となつては重要な意味を持つものとなっている。というのは、後述のように今日では会の性格にまちづくりと連動した歴史理解といったものが加わっており、その理論的根拠として第三条が常に取り上げられているからである。

○第2期（昭和41-48頃）

この時期も、第1期に引き続いて中西義孝が中心であった。会報にはやはり中西の論考が圧倒的に多く、中西以外の投稿は県内外の史蹟見学の旅行記や随想、それと文化財関係の論考がある程度だった。したがって、中西が中心になって論考を書き、会としては県内外の史蹟見学に出かけに行くという活動だったと思われる。また昭和44年3月には、水口町内にある金石文を調べて『金石年表』を郷土史会として刊行している。

ただこうしたなかで、明治21年生まれの中西もさすがに老いていく。やがて体調不良に陥り、会の活動が停滞して会報も出されなくなった。昭和45年3月に会報27号が出された後で、28号が出たのはほぼ三年後の昭和48年1月のことだった。この時、中西は会長職をようやく退いた。会員のなかには、こうした会の状況に対して、「中西義孝前会長の陣頭指揮に引っぱられてどうにか今日まで余端を保って来たが、いよいよ第一線から引退された今日、下手をすると、（郷土史会は——引用者注）のたれ死にの結果を見かねない恐れがある」、「起死回生を願って緊禪一番会員挙げて奮起すべき秋であろう」（会報28号、昭48）と、危機感を表明する会員もあったが、これは中西という突出した郷土史家が引っ張って来た会の活動のあり方に、限界が来ていたということであつたろう。

今ひとり、この時期の郷土史会で目立っているのは、中西利弘という人物であつた（会長の中西義孝と同姓であるが、姻戚ではない）。彼は、元々は農林技師だったが戦後勤めをやめて自分の所有地を果樹園にするため開墾をしていたところ、昭和31年に偶然そこで古墳を発見した。後にこれは水口町（現甲賀市）重要文化財に指定される波濤ヶ平古墳群となるが、これを機に郷土史、特に文化財保護に関心を寄せるようになった人物である。この時期の会報にも幾つか論考を寄せていて、いずれも発見された文化財を「現地に適切な保管施設を造って常時展観したい」というものだった。例えば、会報27号（昭45）に「郷土史会への提案二つ三つ」と題した論考を載せており、提案の一つとして「水口歴史資料館（室）（仮称）創設を提唱する」と主張していた。

中西利弘はその後一貫して資料館の必要性をさまざまなところで主張し、その活動を通じて水口町重要文化財審議会委員、文化財調査専門員や、滋賀県文化財保護指導員等を歴任して文化

財関係の町の重鎮になっていった。

○第3期（昭和49-60頃）

昭和48年に中西義孝が死去すると、郷土史会は活動ができなくなった。会報も5年近く発行されなかった。ただこの間、中西のような一人の突出した人物に依存する形を改め、町内各学区ごとで春秋の年二回、「史談会」を開催するようにした。また研修旅行も充実させて県外一泊、県内一日で行ったので好評を博した結果、会員も増加したという（会報54号、平15）。つまりこの時期に、水口町郷土史会はそれまでの一部の郷土史愛好家たちの集まりから、より広くさまざまな町民が集う歴史の会になったと言えるだろう。

会報も、昭和54年8月に5年ぶりに出された。そしてこれ以降は、いろいろな人が書くようになった。それは、一人の突出した郷土史家のいわば独壇場だった会からの脱皮であったといえる。会報33号（昭56）の「編集後記」では、「郷土に関する調査研究として継続しています。みんなの「郷土史を聴く会」等の開催も、既に伴谷、貴生川、柏木、岩上の各地域を終了しましてその結果、ご投稿くださる会員も漸く、新人が多くなってそのムードも高まってまいりました」とある。この当時、町内の各地区ごとで史談会を開いていたので、会報にもその広告が折りに触れて出ていた。

この時期、郷土史会としての実際の活動の状況は、具体的には分からない。が、会員各自で研究活動や県内外への研修旅行の他、「郷土の史跡研究見学会」（会報35号、昭59）、水口町内での「町内文化財めぐり」や「史談会」（会報36号、昭60）などが開かれていた。また、水口町東部での「東部郷土史学会」や、特に町内和野地区に限った「和野郷土史学会」などもつくられて活動していた（同上）。

○第4期（昭和61-平成5頃）

以上のような郷土史会の性格が徐々に変わっていくのは、この時期からである。それは、公民館と結んだ生涯教育のための団体、単に歴史や民俗を調べるのではなく、それをまちづくりと結びつけて考える団体へと変質したことだった。

まず、町の公民館事業として「練心大学」が始められ、その歴史学科と共催で昭和62年5-7月に、「水口の歴史」特別講座を5回開いた（会報38号、昭62）。これは非常に好評で、これ以後「練心大学」と郷土史会の共催で毎年特別講座が開かれるようになった。そして毎回百数十名が聴講する大規模なものとなり、郷土史会事業の中心の一つに位置づけられた。

他方、この頃たまたま、明治維新後に城下の町家に移築されていた角櫓が水口城に戻されるという出来事があった。この時、郷土史会では町長からの要請で、資金面も含めて全面的に協力した（資金自体は、多くは竹下内閣時の「地方創生事業一億円事業」が宛がわれた）。³⁰⁾ その後、平成4年11月に「水口お城まつり」が始められると、郷土史会はそれにも協賛した。

これらのことと相俟って、まちづくりや地域づくりを表わす言葉が会報に出るようになるのが昭和62年頃からである。当時、水口町では水口城址に面している城南街道を「文化のふれ合いの道」として整備し、国土庁（当時）の「花と緑の都市モデル地区」の指定を受けていた。郷土史会会長西川義郎は「角櫓の復元は郷土史会のかねてからの念願」であり、「水口町のシンボルである城址が観光的存在に脚光を浴びて」きたと述べている（会報38号、昭62）。さらに翌昭和63年1月には、水口町に当時の稲葉稔滋賀県知事がやって来て、郷土史会との懇談会が開かれた。そこでも、角櫓の復元は「城下と宿場の町・水口」の顔づくりであり、「文化のふれ合いの道」である城南街道は「心あたたまる道であってほしい」、また文化財保護についても「行政と住民が一体と

なって、特色ある“ふるさとづくり”に努力したい」と郷土史会から知事に述べられている。これに対して知事は、「湖国二十一世紀ビジョン」を語って答えていた（会報39号，昭63）。

このように、この第4期を境にして郷土史会は従来のような歴史や民俗の純粋な探究団体というよりも、「城下と宿場の町・水口」のまちづくりや地域づくりも視野に入れて歴史や民俗を学んでいく団体へとその活動のための意識をやや変えていったのである。

ところでこの時期の郷土史会の活動としては、上記の「水口の歴史」特別講座が占める意義が非常に大きくなっていた。同講座では、毎年平均して1冊100ページ前後のテキストが講師の協力でつくられており、これも好評であった。同講座では県外への泊りがけの研修旅行も好評で、平成2年の愛媛県「松山城・大洲城跡、道後温泉二泊三日の旅」からは、会報でも詳細に紹介されるようになった。ちなみに松山や大洲は、旧水口藩主加藤家の家祖である加藤嘉明ゆかりの地である。

会員それぞれの研究成果としての論考は、この時期でも多く掲載されている。とはいえ、研修旅行の詳細や、特別講座関係の記事も増えているので、実質的には第3期よりも数は減っていた。

○第5期（平成6-14頃）

この時期、郷土史会では転機となる出来事が三つあった。

一つは、平成11年に公民館事業が郷土史会から切り離されたことである。実は郷土史会では事務局を公民館に置いていて、これまでずっと公民館長が事務局としての仕事を務めてきたのだった。それを町による公民館事業の改革によって、以後郷土史会の業務を公民館はいっさい行わないと通告してきたため、事務局を郷土史会員で分け合っただけで担うこととなった。そこで会では「総務部」「研修推進部」「調査・広報部」と組織化して、部会制を整えた。³¹⁾

転機の二つめは、郷土史会が会の活動として本格的にまちづくり事業と関係し始めたことであった。これは、この時期から会長・副会長などに町議会議員や議長経験者が多く就いてきたこととも関係していたと思われる。これ以前から現町議・元町議が会員になってはいたのだが、この頃から郷土史会をリードする立場に就任していたのである。

ちょうどこの時期、水口町では「東海道水口宿・文化歴史街道整備事業」が行われ、平成8年度からはまちづくり課が役場に設置された。こうした変化のもとで、「我が同志（郷土史会員）も益々活動の範囲を拡充し、歴史と伝統芸能を活かした町づくりに貢献していこうではありませんか」と、西川義郎会長が会報に書いている（会報47号，平8）。

平成7年には、郷土史会主催で「東海道ネットワークの会」総会が水口祭りと合わせて開催され、翌平成8年には水口町で「第九回東海道五十三次シンポジウム」が開催され、郷土史会が大会開催の推進母体、郷土史会長が大会実行委員長に就いた。会員かつ町議の名倉利次は、「提言「水口宿文化歴史街道整備事業」をどう活かしたらよいか——滋賀県文化歴史街道研修会の受講を参考にして」を会報に掲載（会報48号，平9）、翌々年にも「郷土史会とまちづくり」を投稿している（会報50号，平11）。名倉は平成12年には郷土史会長となり、さっそく「歴史を活かした町づくりを」という「あいさつ」を掲載した（会報51号，平12）。

名倉の次に会長になった徳地行雄——彼も元町議——も、「要是水口町官民が協調し、創意工夫をして取り組むことが求められる。私共郷土史会も水口町の史跡や伝統を顕彰しながら、まちづくりに向け生かしたい」と書くなど（会報51号，平12）、歴史と文化を活かしたまちづくりが強調されて、まちづくりと郷土史会のつながりは継続されていった。

郷土史会の転機となる出来事の三つめとして、郷土史会全体での活動とは別に、各公民館単位

で支部組織をつくったことである（平成13年）。そこでは、「支部において、それぞれの地域内の史跡の調査と保存及び史蹟の整備、また地区内における伝説・史実等の掘起し等、身近な歴史の見直しをしていただくと共に地区内会員の交流親睦を深めてもらう」（会報52号、平13）とあり、これ以降今に至るまで各支部単位での活動が活発に行なわれるようになった。

以上のように、この時期の郷土史会は、今の姿の原型がつけられた時だったということが出来るであろう。

ところでこの時期の郷土史会の活動としては、前述の公民館事業改革によって平成11年からは「練心大学」が廃止となったため、同講座の一部を施設内の講演会から開放して現地研修のフィールド学習で行うというかたちに変えていった。平成13年には「甲賀郡の中世城郭を訪ねて」のタイトルで講師のもとに実際の中世城郭跡を訪ねたり、翌14年には「植遺跡並びに泉塚越古墳と横田の渡し」「最勝寺と飯道山を訪ねて」という現地研修を行い、いずれも「好評裏に終局を迎える!!」（会報53号、平14）などとされていた。

他方、会報掲載の論考としては、前期に比べて本数も減り、また当時水口町立歴史民俗資料館学芸員の米田実氏の投稿論稿がしばしば見られるようになった。

○第6期（平成15-21）

この時期になると、各支部ごとでの活動が活発となり、会報でもその活動が紹介されるようになった。それとともに、行政（甲賀市教育委員会歴史文化財課）との関係が深くなる。とりわけ、会報には先述の米田氏を含めて、歴史文化財課の職員の論考が頻繁に載るようになった。これは、一つには自分で論考を書くことのできる会員がいなくなったことの結果でもあろう。かつての中西義孝のように自分で古文書を読んで、自分で調べて歴史的事実を明らかにしていく人が減ったということでもある。加えて、郷土史会の総会には市長や市議会議長を始めとした関連諸団体の長が連年出席するようになった。これは、「町、関連団体との歴史文化事業の協力タイアップ活動」（第5期のタイトル）がそれだけ本格化したことの証左といえるだろう。

そのためこの時期には、郷土史会は自らも単に研究団体というより啓蒙、生涯学習、まちづくりのための歴史・民俗の探究団体をさらに志向するようになったと思われる。水口中央公民館長として平成7年度から4年間、郷土史会の事務局を担当していて、平成21年当時郷土史会顧問であった宇留野可澄が次のように書いている。

「水口町郷土史会の会則第3条に「郷土史の探究を推進するとともに、本町「観光協会」並びに「水口町文化協会」と連携・協調して郷土文化の発展に寄与する」とあります。単なる歴史好きな人の知的好奇心を満足させるだけであってはならないと思います。」

「今後の郷土史会の事業目的は「個々人の郷土観を確立して地域の活性化や地域づくりに生かす」ということを大切にしなければなりません」（『創立五十周年記念 水口町郷土史会 あゆみ50年』平成21、111頁、下線は引用者）。

このように宇留野は、前に少し触れた会則第3条を引用しながら、「単なる歴史好きな人の知的好奇心を満足させるだけであってはならないと思います」と述べている。もちろん郷土史会を創設した中西義孝にしても、単に自分の知的好奇心を満足させることだけが目的であったということはないだろう。が、郷土の歴史にのめり込んで傾倒していた「郷土史の虫」であった中西の行動が、あるいは「単なる歴史好きな人の知的好奇心を満足させるだけ」と映ったのかもしれない。

そのためそうした人ではなくて、「個々人の郷土観を確立して地域の活性化や地域づくりに生かす」人たちが郷土史の会員としてふさわしいと、宇留野には感じられたのだということであろう。このように、郷土史会に求められる人物像も変わって来っていたのである。

この時期、郷土史会自体の活動では、やはり「水口の歴史」特別講座がメインだった。内容は毎年若干の違いはあるが、概ね①県内外の研修、②水口町内の各支部単位の現地研修、③講演会、④米田氏による講演、⑤各支部からの報告会などであった。

ただこの時期になると、会報には、会員たちの研究成果そのものよりも、特別講座、上記①から⑤の個々の報告や、講座とは別に各支部単位の活動報告が論考の形で掲載されるようになっていた。このように会全体として見た場合、自分で地域の歴史や民俗を探究していこうという度合いが薄れてきたためか、平成19年に開かれた三重大大学の藤田達生「織田・豊臣政権下の伊賀・甲賀武士像——惣国一揆論の再検討——」という講演について、会報上で批判が寄せられた。それは、「中世における甲賀武士の活動について」という報告タイトルが当日いきなり変更になったという事情もあるが、それとは別に「惣国一揆論」という専門用語も含めて内容が難しかったというものであった（会報61号、平20）。これは、多くの会員たちはそのような専門的な話は必ずしも望んでいないという批判であったと言ってよいだろう。

○第7期（平成22-30）

この時期には、郷土史会が取り組んでいたことが二つあった。いずれも当時の会長らの発案で、³²⁾一つは自主研修グループづくり、つまり会員たちにアンケートを取って「自分でこういうテーマで研究したい」というテーマを募り、同じテーマ同士で集まって自主研修していこうというもの、もう一つは『郷土歴史読本』の編集執筆であった。だが、肝心の会長が体調不良に陥ったこともあり、いずれも結実しなかった。

また郷土史会の活動としては、この時期のある頃から、「水口の歴史特別講座」という名称を使わなくなった。平成24年度からは単に「特別講座」と言い、同27年度からは個々の回を指して「県内研修」「県外研修」「市内研修」「講演会」などと呼ぶようになったようである（会報79号、平28）。これにはかつての「練心大学」時代とは違う活動であることを明示する意味があったと思われるが、ただ活動内容としてはあまり変化していない。この期を通じて、①県内研修、②甲賀市歴史文化財課や外部の人の講演、③県外研修ということが行われていた。

ところで、会報には総会の記事や研修推進部など会内の各部からの報告記事が増えていた。また74号（平成27）からは、「運営委員会だより」が載せられるようになり、これ以降総会記事や会の各部からの連絡事項、事業報告などが目立つようになった。

こうした傾向を受けてのことか、会報85号（平30）の「研修推進部より」で次のように書かれている。

「さて、先日、郷土史会員の方と話し合う機会があり水口町郷土史会の研修計画について、研修旅行二回、歴史講座二回もいいが、今一度身近なところに点在する水口町内の史跡及び歴史を訪ねる現地研修会を毎年順次一区ずつ実施してはどうか？あるいは、新聞等で紹介される甲賀市内の古くから守り伝えられてきた甲賀の祭を訪ねてはどうか等の話がありました。

郷土史家顔負けの勉強家もいれば、勉強半分楽しみ半分少しだけ歴史に興味がある会員もおられます。魅力ある研修計画をすべく皆さま方のご意見をお待ちしています」（下線は引用者）。

このように、ここで郷土史会の会員を「郷土史家顔負けの勉強家」と「勉強半分楽しみ半分少しだけ歴史に興味がある会員」という二つに分けて考えている点に注意をしておきたい。後でまた詳しく見るように、これは郷土史会としては前者にこだわって郷土史の探究に邁進していくのか、それともほんの少しだけ地元の歴史に興味があるという程度の人に合わせていくのかということが、会の活動の分岐点にもなっているということだったからである。

○第8期（令和元-現在）

この時期は、新天皇の即位があつて年号が変わりやがてコロナ禍に見舞われたため、当初、表立った活動は停滞していた。令和2年にはコロナ禍のため総会では中止、代わって開かれた運営委員会が、総会の役割を果たした。その際、甲賀市の歴史文化財課の課長と課員の二名が出席していて、課長からは「水口町郷土史会が甲賀市のまちづくりに大いに貢献していただいている」というお礼の言葉があつたという（会報91号、令2）。

翌令和3年も総会では中止、代わりの臨時運営委員会が開かれ、やはり歴史文化財課の課長と課員が列席している。この時は、平成30年の文化財保護法改正に基づいて策定された『甲賀市文化財保存活用地域計画』概要版について説明があり、それに対して市の歴史文化財課主導のもとでの文化財の保護活用に郷土史会でも積極的に関わっていく運営の必要性を実感したと、会報94号（令3）では報じている。

郷土史会の具体的な活動としては、令和3年にはコロナ禍のため「新型コロナウイルス感染予防を睨み、今後の研修は当面各支部の輪番により実施すること」になった（会報92号、令3）。その際、「講座名は「歴史講座」、研修目的は「各支部（地域）の歴史を探る」、研修テーマは各支部役員と研修担当の協議で決めることとし、第一回は伴谷支部の担当で、研修テーマを「山村氏（山村城主）と山村天神さんの歴史と探訪」にすると報じられている（同上）。これらの歴史講座は、市の歴史文化財課と連携・指導のもとに実施され、この年以降は各支部担当で歴史講座が開かれている。また、「歴史談笑会」と名付けられた、会員若干名が集まってざっくばらんに日頃自分で調べた歴史や民俗について語る会も催されるようになった。

会報は、多くは総会の報告、運営委員会の報告、それと事務局から要請のあつた各支部からの原稿になっており、会員からの投稿については「特別寄稿」「寄稿」という欄に掲載された。この他、上記の「歴史談笑会」で報告された内容も、原稿化して掲載されていた。

○会員数の変遷

なお、水口町郷土史会の会員数の変遷については資料不足のため詳細には分からないので、次表（表2）に拠りながら大体の傾向をみておくこととしたい。

昭和34年5月に設立総会が水口公民館で開かれた際は「当日は天候も良く、三十余名の参会者

表2 水口町郷土史会会員数の変化

S. 34	S. 41	S. 44	S. 62	H. 11	H. 15	H. 18	H. 19	H. 29	R. 01	R. 02	R. 03	R. 04	R. 05
100+	154	150	328	287	327	337	317	271	265	256	261	253	246

資料：水口町郷土史会『みなくち』各号、『50年誌』、『60周年記念誌』、『広報みなくち』各号から作成。

注：下段の単位は人。

S. 34の「100+」とは100人以上ということ。『みなくち』2号（昭和35）に「昭和三十四年度は目標の百名に達し得ました」とある。

を得て、会発足にふさわしく充実したものであった」とされており（会報1号，昭34），表の注にもあるように同年度内には会員数の目標としていた100人を超えた（会報2号，昭35）。その後は恐らく徐々に増えていき，昭和40年代前半には会員数が150人に達している。やがて初代会長中西義孝の死去後，第4期で見たような地道な活動が功を奏してか，昭和62年には328人にまで増えた。平成11年の時点で287人に減少しているのは，公民館事業が郷土史会から分離された影響と思われる。その後また増加に転じ，平成18年には337人となってピークを成した。この間の増加は，第6期で見たような各支部活動が盛んになったためだろう。地域社会で生きている人たちにとって，自分の身近で歴史の会が活動しているわけだから，入会しやすかったと思われるからである。とはいえその後は再び減少に転じ，令和5年には246人となった。この減少は会員の高齢化の故と思われ，現時点に至るまで減少傾向が続いているといえよう。

このような変化をどう評価するかは難しいが，会員たちの高齢化は確実に進んでいるものの，今のところはまだ200人以上の規模を持つ郷土史団体として維持できているということもできる。これは，前節で検討してきたように，会の歴史のなかで第4期の頃からまちづくりとリンクさせたり各支部での小さな活動を進めてきた結果として，地元の歴史に多少興味があるという人たちが多く会員になったからだといってよい。

3. 水口町郷土史会ではどんな歴史や民俗が語られてきたのか

ところで，水口町郷土史会ではどのような歴史や民俗が語られてきたのだろうか。これまでの会報に載っていた郷土史に関する論考を時代で分けて数え上げたものを，表3として掲げた。ただ時代区分が曖昧なものや，幾つかの時代にまたがっているもの，通時的なものもあるため，完全に正確とは言い難いので一応の目安として考えていただきたい。

さて表3によれば，まず，論考が対象とする時代にはやや偏りがあることが分かる。多いのは戦国時代や近世，民俗についてであり，中世や近代もそこそこあるが，現代（戦後）は皆無である。このうち，戦国期のものにはやはり甲賀武士や関ヶ原合戦時についての論考が多い。また近世については，天保義民一揆が多く見られる。この他，本能寺変後の徳川家康のいわゆる伊賀越えも関心が高いテーマである。家康がどのルートを通ったかを明らかにするということが，論考の主題となっている。

また，ここで民俗に分類しているものには地元の神社仏閣の由来やそこに配置されている金石研究などについての論考が多く含まれている。これらはいわば自地域にあるモノの由来を片っ端から明らかにしていこうというもので，「モノや場所に強烈に執着した「土着」の知のありよう」³³⁾ということもできよう。

他方，前述のように近現代を対象にしたものは多くない。なかでも現代を扱った論考は皆無で

表3 水口町郷土史会ではどんな歴史や民俗が論じられてきたか

古代	中世	戦国	戦国 ～近 世	近世	幕末 維新	近代	現代	民俗	通 時 的	そ の 他	計
11	20	53	3	49	3	18	0	48	30	25	260

資料：水口町郷土史会『みなくち』各号から作成。

注：下段の単位は論考本数。

あるから、高度経済成長期以降の社会変動のなかでの地域の変遷に言及したものはまったくない。したがって、「地域の古老たちのライフヒストリーを聞く」とか「地域での聞き書き」といったテーマは存在しない。会報も103号を数えているが、現代史（戦後史）について触れているのは、管見の限り二人だけであった。それも、論考というよりも戦後の変動の記録作成が必要ではないかという提案だったので、上表でも「現代」を扱ったものとしては数えなかった。³⁴⁾

このことについて明確な理由は分からないもののあえて推論すると、一つにはこの地域の特性として、歴史が古いだけに指定・未指定を問わず文化財や歴史的故事が多く、郷土の歴史といえばそうしたことがすぐに思い当たるからではないか。しかも会員たちに高齢の人が多いためであれば、自分自身が生きてきた時代の変化は調べなくても分かっていることであり、興味が湧かないのではないだろうか。例えば沖縄県では各字ごとに字誌が熱心につくられているが、これを社会教育の立場から検討した末永誠氏によれば、つくられた字誌自体に対する地元の人たちの反応は鈍いということである。その理由として、字誌で書かれていることは地元の人たち（「シマの内側の人々」）には「既知の事実が改めて記述される」だけだから、分かっていることを改めて読もうとはしないのだと指摘されている。³⁵⁾ このことから考えてみれば、古代からの歴史資源が豊富で歴史のテーマには事欠かない当地にあって、自分たちが経験してきた既知のことを「歴史」として改めて取り上げようということがなかったのではないかと思われる。いずれにしても、現代社会における社会変容と個々人のライフヒストリーなどへの関心とその前提となる論理的枠組みは、少なくとも水口町郷土史会では、強いものではなかったということがいえるだろう。

V. 地域の歴史への関わり方とその多様化

1. 郷土史団体に集まる二つのタイプ

前章で見てきたように、水口町郷土史会の歴史で見られたのは会員の減少や高齢化だけでなく、会員の志向性の変化、時代や社会の変動に応じた会としての性格の変化であった。会としては「単に歴史好き」よりも、まちづくりとつながった歴史のありようを志向するようになっており、かつての「郷土史の虫」はいなくなった。いわば、郷土の歴史にほんの少しだけ興味がある——冒頭の田村貞雄氏の表現によれば懇親の昼食会や史蹟見学には喜んでにぎやかにやって来る——人たちの割合が増えたのである。

だが、このような変化は水口町郷土史会に限ったことではない。水口に隣接する旧甲南町でも、甲南地域史研究会初代会長が以下のように郷土史団体のありかたを「史実追及自己研究型」と「史跡で弁当・拝聴型」に分けている。

「(前略) 以上のことが機縁となり、『甲南町地域史研究会』と呼称し、文字通り会員自身による「地域史研究」を目的とする、本会が発足したのである。

年齢を重ねてからの歴史愛好者が多いようであるが、強いて誇張して分類すると『史跡で弁当・拝聴型』と『史実追及自己研究型』に分かれる。この歴史愛好の質と水準の差異が会運営の在り方を左右する。以前、公民館事業の柚大学歴史部会が苦勞された主因もそれだったと聞いた。だから無理は禁物、高きを望めば失敗する。世の多くの「郷土史会」は大方このような立場で運営されているようで、勿論「自己研究者」の不満は免れ得ないが少数派である。本会は「研究会」と銘を打ち、敢えて会員各位が「歴史する」探究の閃きと追体験の喜びを体験して頂き、それを発表して頂くことを会則にうたっている」(服部勲「はじめに」)

甲南地域史研究会『地域の歴史』平成18, 下線は引用者)。

これは「史跡で弁当・拝聴型」に類する人たちをいささか軽く扱った論調となっているが、重要なのはむしろ、多くの郷土史団体では「史実追及自己研究型」の人たちと「史跡で弁当・拝聴型」の人たちとの間の葛藤が常に問題となり、その際前者に比べて後者が圧倒的多数を占めているという点であろう。これは言うまでもなく、水口町郷土史会で言われていた「郷土史家顔負けの勉強家」と「勉強半分楽しみ半分少しだけ歴史に興味がある会員」という分け方と共通するものであろうし、田村貞雄氏の指摘とも共通する区別である。

そしてこのような違いは、郷土史団体としては決して珍しいことではない。例えば兵庫県の淡路地方史研究会でも、昭和50年代後半に「これまでの研究会は研究者の組織であり、学校の教員が多かったが、研究者だけではなく、淡路の歴史・民俗・文化財などに興味関心をもっている人に呼びかけて入会してもらい、淡路の地方史を学ぼうとする人々を増やし、歴史や文化財などを大切にする気風を広めて行こうということになった」という変化が指摘されていた。³⁶⁾

このように、甲南地域史研究会でいう「自己研究者の不満」や田村氏のような憂いはあるにせよ、郷土史団体では「勉強半分楽しみ半分少しだけ歴史に興味がある会員」たちが往々多数派なのであり、したがって彼らのことを考慮しなくては、会の活動は理解できないということが、改めて指摘できるだろう。³⁷⁾

2. 少人数のグループと行政

その一方で、近年では市内の一地区だけを対象として歴史やその地区にあるモノの由来を調べて記録していこうとする小グループが行政部局に相談してアドバイスを受けていくケースが多々見られる。例えば水口では、町内の宇田地区で古文書整理の際に、甲賀市歴史文化財課に相談して水口町郷土史会とは別に宇田地区だけで「宇田郷土史会」を作って課員に導かれながら報告書をまとめている。³⁸⁾ この点、中西義孝がいた頃の昭和30年代の水口町であれば、まずは中西や郷土史会に相談に赴いたのではないかと思われるが、今日ではむしろ、歴史を「仕事」とする行政の専門家にまずは依拠しているのである。

同様の例として、水口町内今郷地区の「好日会」も挙げることができる。これは、「平成二十四年度から甲賀市の市民協働活動（歴史文化財課）で採択された歴史街道まちづくり整備事業を中心とする「今郷・好日会」の人・まちづくり活動」のことで（会報83号、平30）、平成22年9月に有志9名で結成されたものだった。そこでは、「団体で地域に密着した歴史街道整備活動を行って」おり、具体的には、①旧東海道に花を咲かせる活動、②街道見学者への案内板の設置、③休憩所「郷の里」の建設とメッセージボードの設置、④地蔵プロジェクトと鹿折ひまわりプロジェクト、⑤今在家城址の整備活動、⑥岩上ふるさと絵屏風の作成、⑦県近隣景観形成協定の締結、⑧水口干瓢を復活させる活動という活動を行っていたとのことである（会報87号、平31）。むろん、これらの活動には市の歴史文化財課が相談や助言の形で深く関わっており、まちづくり活動に携わりながら地域の歴史素材に触れていくという意味で、地域の歴史への多様な関わり方を示していたといえるだろう。

もちろん、これは甲賀市だけのことではない。同じく滋賀県で言えば、守山市矢島地区でも近世村のエリアで数人から十人程度の会を作って地区の歴史を明らかにしようという時、同市文化財保護課の職員に相談している。矢島地区は戦国期に興福寺から脱出した足利義昭が一時「矢島御所」に滞在していた地区であり、遺構ものこっているため、有志が集まって「矢島歴史の会」

をつくって矢島の歴史を調べて成果を出している。³⁹⁾ また同市勝部地区でも、数人のグループで地域史誌をつくったり地区内の地蔵を片っ端から調べ上げて報告書をつくる際には、やはり文化財保護課に相談していた。⁴⁰⁾ このような事例からは、今日においては行政の働きの意義が大きいこと、人びとが地域社会の歴史に関わる、その関わり方も水口町郷土史会のような郷土史団体に加わることで多様化していること、この二点が指摘できるだろう。

3. 地域の歴史に関わっていくこと

さて以上のように検討してきたが、これを最初の問題設定に立ち返って考えてみたい。つまり、郷土史団体の歴史・現状についてと、地域の歴史と住民の関係である。

まず、郷土史団体の歴史・現状についてまとめると次のようである。

昭和34年に地元では突出した郷土史家だった中西義孝を中心に設立された水口町郷土史会は、当初は中西を中心とした研究会だった。それが中西死去後、混迷期を経て合議的な組織で郷土史研究活動が行われるようになった。やがて平成に入る頃から会の性格に生涯学習やまちづくりの要素が入ってきて、その後は行政との連携が強くなった。その頃には、郷土史会にはかつての中西義孝のように自ら古文書を渉猟して読解・分析していく郷土史家よりも、「勉強半分楽しみ半分少しだけ歴史に興味がある会員」の方が多くなっていた。また会のなかでも「郷土史の虫」よりも、「個々人の郷土観を確立して地域の活性化や地域づくりに生かす」人たちが志向されるようになっていた。会員数がこの20年間ほどは徐々に減り続けていて高齢化しているのは確かであるが、会の活動も現在ではそうした会員たちを考慮して、主に生涯学習団体としてまちづくりなどにも関与する会というべきものになっている。またそれと並行して、従来の郷土史団体とは別に、より狭いエリアに少人数グループに集まって行政に相談や指導を受けることも多く見られる。このように、地域の歴史への関わり方に変化と多様化が見出され、郷土史団体を取り巻く環境にも変化があったことが指摘できる。

では、地域の歴史と住民の関係という点はどうだろうか。水口町郷土史会では、当初は初代会長中西義孝がひとり突出していたものの、第3期以後は多くの会員たちが自分なりに調べた地域の歴史が会報には載せられていた。しかし現在の会報を見ると、多くは総会や運営委員会の報告、事務局から要請のあった各支部の原稿で、自分の論考を出す人は「特別寄稿」「寄稿」という欄名が特に附せられるようになっている。その反面で各種施設の見学会などは盛んで、直近の催しで長浜市にある「国友鉄砲の里資料館」の見学（令和5年11月）もいたって盛況であった（会報101号、令6）。彼らは、注37で昭和30年代の野球解説者の言を紹介して説明したように、「自分たちより半歩くらい先の水準のこと」や、何か新しいことを「覚えようという一つの知識欲をもって」参加した人たちだったと考えられる。

このように現在の水口町郷土史会では、多くの会員たちは地域の歴史に対して、自ら調べて書くというよりも、歴史やモノの由緒、由来を見たり聞いたりして知識を得ることで地域の歴史に関わっているのである。その意味では、近隣の旧甲南町で「史跡で弁当・拝聴型」と言われていた多くの人たちも、史跡に出かけて行ってそこがどんな場所であるかを見て、その説明を拝聴したくなるほどの好奇心を持った人たちということになる。⁴¹⁾ このように考えてくれば、彼らの歴史関心に対応し、地域の歴史に関わっていくための集まりとして、今日の水口町郷土史会は機能しているといつてよい。地域の歴史と住民の間の仲立ちとして、同会の意義を見出していくことができるのである。

Ⅵ. 郷土史団体の行方——まとめに代えて

本稿では、主に会報を読み解くことを通じて水口町郷土史会の経緯と現状について論じてきた。ただ、第5期以降に見られるようになった各支部単位での活動については紙幅の関係もあって言及できなかった。もちろん支部によって活動に活発/不活発の差異はあるものの、水口町郷土史会では現在各支部単位での活動が大きな位置を占めるようになってきている。かつての中西義孝のような突出した郷土史家たちがいなくなった今日では、むしろ自分の生活する身近な地区で歴史の会に加わって自分たちの地区の歴史や民俗を明らかにしていこうという小さな活動が、より大切なものになっているということもできよう。本稿ではそこまで論じきれなかったので、今後は改めてこうした支部活動の現場に降り立って調べていきたい。そのことを通じて、人びとが（会員が）地区の歴史にどのように関わっているのかを明らかにしたいと考えている。

ところで、水口に限らずこうした郷土史団体はこれからどうなっていくのであろうか。本稿ではこうした問いに答えることはできなかったが、近年では大学の歴史学の専門家たちと郷土史団体との協働がしばしば見られるので、一つにはその点から将来の可能性を考えていくことができるであろう。⁴²⁾ その際、このような協働を通じて「郷土史家顔負けの勉強家」たちの不満は解消されるかもしれないが、その反面で「勉強半分楽しみ半分少しだけ歴史に興味がある会員」が取り残されては元も子もない。したがってその際は、後者の志向性も十分に配慮していくべきだと思う。

ただ、郷土史団体の変遷は多種多様といってよい。滋賀県内の他の郷土史団体を見てみると、会員の高齢化や中心人物の死去のために休会状態に陥っているところもある。また、滋賀県以外に目を移せば、月刊の会誌『伊那』を昭和20年代後半の創刊以来一度も休むことなく刊行し続けている長野県下伊那の伊那史学会や、ごく一時的に合併号を出したことはあるがやはり昭和30年代初頭から月刊誌『伊那路』を欠かさずに出している同県上伊那の上伊那郷土研究会など、これらは生涯学習団体としてまちづくりなどにも関与している水口町郷土史会の活動とは異なる歴史を経てきているだろう。したがってそう考えると郷土史団体のあり様はさまざまで、水口町郷土史会の一事例を以て郷土史団体全般を語ることは難しいことである。

それと同時に、旧水口町宇田地区や守山市矢島地区・勝部地区のように、市の歴史文化財課や文化財保護課に相談しながら活動している小グループも多く見られたり、自治振興会主催の歴史講演会が盛況であるなど（注40参照）、自地域の歴史や、そこにあるさまざまなモノの由来への地域住民たちの関心は決して低くない。本稿では、それらの詳細を論じるまでには至らなかったが、郷土史団体の現状、ひいては現代社会における郷土史研究のあり様を総括していくためには、多くの事例を集めることと、地域の歴史に関わっていくさまざまな回路（手段）を一つ一つ検討して精査していくこと、これらが必要になってくると考えられる。本稿は、そのための第一歩として考えていくこととした。

注

- 1) 木村修二「小特集にあたって（〈小特集〉地域史研究団体の潮流）」『Link：地域・大学・文化：神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報』第14号、令和5、99-100頁。
- 2) 飯澤文夫氏によれば、「郷土史研究の範囲は、歴史から広く民俗、社会全般に及ぶ総合研究であり、まさに民衆史、生活史、文化史である。そして、学ぶことを通じて、郷土の発展、地域コミュニケーション

- ンの向上に寄与しようとする愛郷精神が底流に流れている」とされる（同「郷土史団体の現在」神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター編『『地域歴史遺産』の可能性』岩田書院、平成25、164頁）。
- 3) 同、163頁。
 - 4) 同、167頁。なお、田村貞雄「地方史研究会の衰退」（『東海近代史研究』第30号、平成21、98-99頁）も参照。
 - 5) この拡大例会の記録は、『年報近現代史研究』第10号（平成30）の81-113頁を参照。
 - 6) 同誌で掲載されている論考は次の通りである。武田信一「淡路地方史研究会の創立とその後の歩み」、足立義昭「丹波市における郷土史研究の潮流：近代～現代」、進藤輝司「旧美嚙郡から三木市誕生後の郷土史研究の流れ」、今井進「多紀文化顕彰会の歩みを継承し、新たな活動にむけて」、宮本博「明石における地域史研究と黒田義隆：『明石市史上巻』刊行への歩み」。
 - 7) 高田雅士『戦後日本の文化運動と歴史叙述』、小さ子社、令和4。
 - 8) この他、主に明治期の奈良県の郷土史を扱ったものとして、黒岩康博『好古の瘴気——近代奈良の蒐集家と郷土研究』（慶応義塾大学出版会、平成29）、同書に関連した研究に、久留島浩・高木博志・高橋一樹編『文人世界の光芒と古都奈良——大和の生き字引・水木要太郎』（思文閣出版、平成21）がある。近代の史蹟保存事業の観点から郷土史に触れたものとして、齋藤智志『近代日本の史蹟保存事業とアカデミズム』（法政大学出版局、平成27）、特に第9章、第10章も参照。
 - 9) 前掲田村、99頁。
 - 10) 市川秀之「滋賀県下の字誌にみる歴史実践」（菅豊・北條勝貴編『パブリックヒストリー入門 開かれた歴史学への挑戦』（勉誠出版、令和元、196頁）によれば、滋賀県ではこのような地域史誌が、定義にもよるが400点以上は刊行されてきたし、今もなお増え続けているということである。
 - 11) 地域史誌の詳細については、拙稿「地域で地域の歴史を書く——大字誌論の試み——」（野上元・小林多寿子編著『歴史と向きあう社会学——資料・表象・経験——』第3章、平成27）、同「複数の「歴史」——地域史誌編纂の現場から考える——」（『社会学年誌』第58号、平成29）、同「地域史と住民——肯定的な記録としての地域史誌——」（『都市問題』第113巻第4号、令和4）なども参照のこと。
 - 12) 羽賀祥二「近現代史研究会十月拡大例会報告」『年報近現代史研究』第10号、平成30、84頁。なお、同稿によると、「近現代史研究会十月拡大例会」で白井哲哉氏は報告をしたが、『年報』発刊までにその原稿化が間に合わなかった。そのため羽賀氏が、論考の代わりとして例会報告時の白井氏のレジュメから要点を抜き出してまとめたものが、上記の羽賀報告であるという。
 - 13) 羽賀祥二「郷土史の誕生」『いま、歴史資料を考える 名古屋大学文学部創設50周年記念公開シンポジウム報告集』名古屋大学文学部史学科、平成11、99-111頁。
 - 14) このような活動をしていたからだと考えられるが、かつては郷土史団体に集まっていた人たちのなかには、自分たちこそが地域史の最前線に立っているのだという自負心があったようである。滋賀県東近江市の八日市郷土文化研究会前会長の中島伸男氏によれば、「市役所には、かつては歴史に関する職員がほとんどいなかった。だから、八日市郷土文化研究会のわれわれこそが、市全体の歴史を背負っているような感じがしたものだった」と言われている（東近江市八日市にて聞き取り、令和5年8月9日）。
 - 15) 前掲飯澤、164-165頁。
 - 16) 前掲飯澤（169-170頁）には、同稿執筆の平成21年当時の、全国諸郷土史団体の新しい試みがいくつか紹介されているので参照されたい。
 - 17) 令和5年7月21日、水口町郷土史会副会長竹崎文雄氏からの聞き取り。
 - 18) 会報は、水口町郷土史会の周年記念として刊行された記念誌のなかで復刻されている。本稿では以下の周年記念誌を利用した。
 - ・水口町郷土史会記念誌編集委員会編『水口町郷土史会創立四十五周年記念 会誌 みなくち』水口町郷土史会、平成15
 - ・同『創立五十周年記念 あゆみ50年』水口町郷土史会、平成21
 - ・同『創立60周年記念誌 歴史・伝承を引き継ぐために』水口町郷土史会、令和元
 - 19) 太田光俊「三重県の地方史関連雑誌素描」『地方史研究』第419号、令和4、77頁。
 - 20) 以上、旧甲賀郡・現甲賀市の歴史に関する部分は、『甲賀水口の歩みと暮らし』（水口町立歴史民俗資料館、平成6）を参照した。

- 21) 甲賀郡郷土史研究同好会については、「甲賀郡郷土史研究同好会発会近し」(『滋賀郷土史』第1号, 昭和32, 46頁) 参照.
- 22) 甲賀郡郷土史研究同好会は, 滋賀県甲賀郡教育会と共編で, 昭和33年に『甲賀の民謡』を刊行している. またそれより以前, 昭和31年に「郷土史関係資料展」も開いているようだが(甲賀郡郷土史研究同好会編『郷土史関係資料展目録』昭和31), 詳細は不明である. ちなみに注21にあるように, 昭和32年発行の『滋賀郷土史』第1号で「甲賀郡郷土史研究同好会発会近し」という記事が出ているので時間的に整合していないようでもあるが, 同記事が書かれたのが昭和31年の「郷土史関係資料展」以前だったと考えれば矛盾しない. もっとも, 正確なところは不詳である.
- 23) 鹿深史談会については, 「鹿深史談会が発足/郷土史に関心の会員募集/会長に神山隆之さん」(『甲賀新聞』第899号(昭和56年7月25日)), 「〔主張〕神山隆之(鹿深史談会長) 郷土文化の発揚に/ふるさと甲賀の特性を」(同, 第900号(昭和56年8月15日))を参照.
- 24) 『彦根郷土史研究』第二集, 昭和32, 97頁. 「会報(史談会日誌)」欄にある.
- 25) 各地の郷土史団体の会誌・会報, それと回想などを読むと, しばしば「郷土史の虫」という表現が出てくる. かつては「〇〇〇の虫」という言い方がよくされていたので, その一つであろう(例えば, 稽古熱心な力士のことを「稽古の虫」と言っていた). 「郷土史の虫」と呼ばれていた人たちは, まさに歴史好きであり, 歴史となったなら目の色を変えてのめり込んでいった人たちであつたろうと思われる. 中西自身も追悼号のなかで, 「まあ郷土史の虫といってよいお人やった」と言われていた(会報29号, 昭和49).
- 26) 大正期の『甲賀郡誌』編纂のための史料収集でも, 中西が非常に熱心かつ実証的に努力していたことが, 服部源一郎「私の古文書調査」(『滋賀県地方史研究紀要』第二号, 昭和48)のなかで, 大正9年9月の思い出として語られている. ちなみにこの服部源一郎自身も, 「青年時代より郷土史研究家として造詣深く, つとに古文書の収集, 探索, 郷土に残る伝説, 古来伝わる儀式・行事その他広く町内外にわたる, その道のエキスパートであると思う」と, 地元で崇敬されている郷土史家だった(林正一「座右の書」に推薦)服部源一郎・奥村清夫編著『甲南町人物誌』洛樹出版社, 昭和47).
- なお, 中西義孝については, 中西が収集していた資料や遺品が令和5年に遺族から甲賀市に寄贈され, 現在同市歴史文化財課で整理中である. それらが整理・分析されれば中西像が, より明らかになるだろうと思われる.
- 27) 水口町では, 昭和28年に町史編纂が議決され, 委員の一人として中西義孝も挙げられていた(『水口町報』第8号, 昭和28年8月1日). しかしその後, 事情は不明ながら町史編纂は京大の研究者らに委ねられた. すなわち, 柴田実が監修校閲し, 実際の執筆は石田善人, 朝尾直弘, 佐々木隆爾という, 後に歴史学界を背負って立つことになる若者たちが充てられ, 上中下三冊から成る『水口町志』がつくられた. 通史編である上巻の刊行は昭和35年2月であった.
- 28) 役員の人数については会報1号より. また役員たちの職業については, 甲賀市「まるーむ」にて杉本杉一会長ら三役から聞き取り, 令和6年1月24日.
- 29) 前掲『創立五十周年記念あゆみ50年』11, 25, 35, 45, 59, 73頁.
- 30) 「ふるさと創生1億円の使い道 観光, イベントが中心 3割が具体案決定 共同通信が273自治体を調査」(『中日新聞』平成元年3月27日朝刊).
- 31) 部会はその後幾度かの変遷を経て, 本稿執筆時点(令和6年9月)時点では総会開催などを行なう本部の他, 研修(史跡や諸施設の見学)や歴史講座を開催する「研修推進部」と会誌を発行する「調査広報部」の二つになっている. それ以外に, 水口, 伴谷, 柏木, 貴生川, 岩上の各支部に分かれた活動がある(会報103号, 令和6).
- 32) この時期の郷土史会会長は平田憲(元町議)と谷川藤平(元教育長)という二人で, 平田は郷土史会の高齢化・会員減少と企画のマンネリ化に, 谷川は会員の主体的参加という点で, それぞれ危機感を持っていた.
- 33) 前掲黒岩, 5頁.
- 34) その二つとは, 加藤孝昌「〔地域活動の報告〕伴谷支部と春日での最近の活動」(会報54号, 平15)と秋田通雄「これからの本会活動に私の想い」(会報83号, 平成30)である.
- 35) 末永誠『沖縄のシマ社会の社会教育的アプローチ——暮らしと学び空間のナラティブ——』福村出版,

平成25, 203-206頁。

36) 前掲武田, 137頁。

37) それではこのような会員たちは、どのような人たちなのか、これについてはやや突飛であるが、プロ野球中継の視聴者と解説者について語った次のような説明が参考になると思われる。

昭和30年代にNHKのテレビやラジオの野球中継で志村正順アナウンサーと解説者の小西得郎のコンビが人気を博したということがあった。小西は明大出身でプロ野球草創期から監督を務めていた人物で、当時既に60歳を越していた。その小西が解説者になって一年ほど経った昭和31年にこの二人の対談が雑誌に掲載されており、志村と小西はそれぞれ次のように語っている。

「小西　そこで私も非常にいい気持ちになったのですが、これはプロ野球の選手に聴いてもらうより、一般ファンにわかることが一番で、そのためには親切にということが大事じゃないですか。

志村　それはそうです。しかしファンはあまり程度の落ちたものには喰らいつかないですよ。自分たちより半歩くらい先の水準のことをいってもらおうと、飛びついてくるものです。

小西　そうでしょうね。ちょっとわからないことをいったら、あの人は偉いというもの。(笑)

志村　野球の場合でも、一般のファンにはちょっと高級すぎると思うようなこともたまにはいったほうがいい。例えば杉下のピッチングの解剖、あるいは中尾のピッチングの特徴、山内のバットの振り方などについて、素人がふだん考えつかないことをおっしゃるのは、一般ファンのレベル向上に役立つ。それが選手のためにもいいし、一般のファンに喜ばれる線じゃないですか。

小西　どうもそうらしい。一年だけの経験ではまだよくわからないのですが、しかしどうも一般の方は、何か知識を求めようとなすっている。ただラジオを聴いて楽しむだけでなく、そこから何か新しい野球を覚えようという一つの知識欲をもって聴いていられる。だからやはり三面記事みたいなことばかり喋ってはいけけないので、時々薬をきかせて、ちょっと難かしいようなこともいってみる。(後略)「『アナウンサー連載対談 26 小西得郎・志村正順』『放送文化』第11巻第5号、昭和31, 42頁。後に小西得郎『したいざんまい——私の懺悔録——』昭和32, 所収。なお、下線は引用者)。

ここで言われている「自分たちより半歩くらい先の水準のことをいってもらおうと、飛びついてくる」(志村)、「一般の方は、何か知識を求めようとなすっている。ただラジオを聴いて楽しむだけでなく、そこから何か新しい野球を覚えようという一つの知識欲をもって聴いていられる」(小西)という点が、郷土史会の会員たちにもあてはまるのではないか。つまり、「勉強半分楽しみ半分少しだけ歴史に興味がある会員」にせよ、ほんの少しだけ地元の歴史に興味があるという程度の人たちにせよ、地元の歴史について真摯に新しい知識を求めようとしていることに間違いない。しかしそこで、あまりに専門的に過ぎると先述のように難し過ぎるという批判が起こってしまう。彼らはそこまで専門性を欲しているのではなく、むしろ「自分たちより半歩くらい先の水準」にある知識を求めようとしている人たちということになるのではないか。もちろん、当初はそうした水準を望んでいたとしても、より専門性を志向する人がそこから出てくることもあり得る。本稿で述べるように、行政の指導によりながら「少人数グループ」で活動していく人たちはその一例ということができよう。

38) 「宇田郷土史会」については、佐野正晴「地域住民との協働による実践とその今後の展開に向けて——滋賀県甲賀市・宇田郷土史会の事例から——」(『九州保健福祉大学博物館学年報10』令和3)に詳しい。

39) 守山市「矢島歴史の会」会長八幡吉治氏からの聞き取り、令和6年1月27日。

なお、「矢島歴史の会」の成果物としては、『守山市 矢島のむかし』(令和2)、『冊子 旧矢島村庄屋 林家コレクション』『近江國野洲郡矢嶋村 村誌——活字による翻刻版(注釈付)』(いずれも令和4)などがある。

40) 守山市勝部地区は毎年1月に催される火まつりで有名なところで、本稿で示したグループも、同地区にある火まつり交流館で活動している。勝部史誌編纂委員会編『勝部史誌 勝部自治会火まつり交流館建設記念』(認可地縁団体勝部自治会、平成29)や、勝部の文化伝え隊 歴史文化サロン編『勝部の「お地蔵さん」調査報告書』(認可地縁団体勝部自治会、令和4)などの成果物がある。

41) 滋賀県では、多くの自治体で市町役所と町内会・自治会の中に自治振興会などの名称の中間団体が設置されている。自治振興会のなかには歴史部会が置かれ、その主催で歴史講演会が開かれることもある。例えば甲賀市甲南中部自治振興会歴史部会では、『家康と甲賀忍者大原一族』の著者大伴原甲賀氏による歴史講演会を令和6年1月28日に同市旧甲南町にある「忍の里ブララ」で開いた。筆者も参加し

たところ極めて盛会で、参加者名簿によればほとんどは地元の住民たちであった。

- 42) 大学と地域社会の協働という点では、神戸大学地域連携センターが既に二十年以上にわたって活動している。詳細は、同センターのHPならびに連年の年報（『Link：地域・大学・文化：神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報』）を参照されたい。

謝 辞

本研究は、東京国際大学2023年度国内研修「地域社会における歴史意識についての実証研究」の成果である。

本稿脱稿後、井上隆男「郷土研究のいま——千葉県の場合——五四市町村教委にアンケート回答報告」（『郷土史研究』第74巻第5号、令和6、95頁）を通じて、毎日新聞紙上の記事「郷土史研究はいま」（令和6年3月15日）の存在を知った。井上氏によれば、「二〇二三年一〇月～一十一月に実施したアンケートの結果、教委が把握している団体は計九九、このうち解散・休止状態にある団体は一七あることが分かった。高齢化による会員の減少に歯止めがかからず、「町の歴史の継承のため必要不可欠」（九十九里町）など、将来の不安を訴える回答も数多く見られた」ということである。本稿では滋賀県全体への視角を示し得なかったので、それについての検討は千葉県の事例を参照しつつ改めて滋賀県で検討するなど今後を期したいと思う。

また、水口町郷土史会の創設者である郷土史家・中西義孝が集めた資料などが甲賀市に寄贈されて整理中であることは注26に記した通りであるが、同会の「令和六年度 第一回歴史講座」として資料整理の概況が令和6年10月3日に報告された。詳細は会報『みなくち』第104号（令和7年1月1日）の「（故）中西義孝氏収集資料調査報告会開催される」に書かれているが、この報告会はいくまでも「概況」で、同資料の扱いは今後郷土史会の「事務局での協議となっている」ということである。